

[時代の証言者] 共産党・不破哲三 80歳(1) 16歳で入党、人生の転機

2010.11.01 朝刊 8頁

40歳の若さで共産党書記局長に就任して以来、党を指導してきた不破哲三さん。当選11回の衆院議員として18人の歴代首相と論戦を繰り広げ、「自主独立」を掲げて旧ソ連や中国の共産党とも論争した。党の歴史と半生を振り返ってもらおう。(政治部 鳥山忠志)

誰にも人生の転機となる出来事があると思います。今年80歳になった私の人生の転換点は、戦後間もない1947年に16歳で共産党に入党したことです。それで生き方が定まったという思いがありますからね。

《この年は4月に学制を「六・三・三」制と改めた学校教育法が施行され、5月3日に日本国憲法が施行された。食糧難は続き、10月、配給だけで生活していた裁判官が餓死した》

当時は非常に混乱した時代でした。この社会状況は敗戦のショックだけでなく、旧体制が壊れたことにより生み出されたのです。

混乱といっても、今のような閉塞(へいそく)感はないんですよ。生活はめちゃくちゃだったし、明日食べる物にも苦勞していた。それでも、どう生きるべきかという自分の問題と、これからの日本をどうしたらいいかという政治的な問題を重ね合わせて、針路を探求しようという意欲は、社会のいろいろな面で底流になっていたと思います。

自由が生まれ、それまで許されなかったものに触れることができるようになった。その中で私はマルクスに接近し、共産党と出会い、その運動を自分の生きる道にしようと決めました。

それから党にも私にも、大きな波乱がありましたよ。社会全体がそうでした。

64年に党本部で働き始めた直後、ソ連共産党との間で干渉問題を巡る国際的論争が始まり、人生の節目と党史の節目が重なったこともありました。国会議員になり、党指導部で仕事をすると予想もしなかった。

党勢の消長や、私たちの運動にとって厳しい時代もありました。でも、社会を変えようと志す者には大局において「革命的楽天主義」があるんです。

私はよく20世紀論を例にします。20世紀は、断面を切り取れば戦争ばかりでしたよ。しかし、世紀の始まりには珍しかった国民主権国家や民族自決権が、今では当たり前という



世界になっています。長い目で見ると、人類の歴史がものすごく進歩した時代なんです。

社会に害悪があれば、それを乗り越える力が必ず生まれる。私たちの運動はそういう展望があって成り立っているわけだし、そう信じてやってきました。(この連載は、月～木曜と土曜日に掲載します)

◇ふわ・てつぞう 本名・上田建二郎。1930年(昭和5年)、東京都生まれ。東大理学部卒。69年に衆院初当選後、党書記局長、委員長、議長を歴任した。現在は党常任幹部会委員、党社会科学研究所長。故上田耕一郎・元参院議員(元共産党副委員長)は兄。

[時代の証言者] 共産党・不破哲三(2)「神国」信じた軍国少年

2010.11.2 朝刊 12頁

幼いころは体が弱くて、「虚弱児童」「腺病質」という言葉がついてまわる子供でね。学校を休むのも当たり前でした。泣き虫で、悲しいにつけ、うれしいにつけ、感情を動かされる出来事があると、床の間に行ってこっそり泣くので、家では「床の間」というあだ名がついていました。

両親は私の健康を気遣い、外で遊べば遊ぶほどほめてくれたものです。父の上田庄三郎もよく外に連れて行ってくれましたが、電車などには乗らないことが多い。生まれ育った野方(現東京都中野区)は当時、林や野原がいくらかもあり、そこを歩き回るわけです。

子供たちだけでも遠くまで遊びに出かけました。一番の長距離遠征は、戸山ヶ原という練兵場です。演習用の大きな山がいい遊び場なのですが、土曜の午後に出かけたら、着いたのはもう夕方。近くにあった友人の親類の家で電車賃を借りて、やっと帰りました。

両親は高知出身。父は足摺岬の近く、母の鶴恵は四万十川のひとつりの生まれです。2人とも若い頃は小学校の教員をしていました。

父は教員時代、自由主義教育を唱えました。教員の組織を作って待遇改善運動にも取り組み、「全国最初の教員組合だ」と言っていました。当局の懐柔策とも思われますが、20代で校長になったんです。しかし、最後には退職を勧告され、上京後は教育評論などで生計を立てていました。

夫婦と祖母、子供5人を筆一本で支えるのは並大抵ではなかったと思います。物書きだから、本だけは家にたくさんあ



父の上田庄三郎

りました。母も本が好きだったし、姉や兄が持ち込んでくる本もあります。大衆作家の村上
なみろく るいこう がんくつおう
浪 六 の人情もの、作家でジャーナリストの黒岩 涙 香 が翻訳した「巖 窟 王」
ああ
や「噫 無情」など、読めそうな本は片っ端から読みましたね。

そのうち、父が書き捨てた原稿用紙の裏側に小説を書き出して、自分で本の形にしたもの
が今もいくつか残っています。雑誌に載ったものもあるんですよ。

科学小説では海野十三、歴史小説は吉川英治が好きでした。1940年、10歳の春には父が
手紙を出してくれて、一緒に吉川さん宅を訪ねました。

1時間ほど話したかな。吉川さんは「20歳になってまだ小説を書く気があったら、また来
なさい」と言いました。名言ですよ。中学校に入る頃には軍艦マニアになって造艦技師志望
に転向し、20歳になるとさらに転換していましたからね。

42年4月、府立六中（現新宿高）に進学しました。3年生になると勤労働員が始まり、2
学期からは大崎にあった「明電舎」という飛行機用の通信機器工場で働きました。戦況がど
んどん悪化しても、「神国日本は負けるはずがない」と本気で思っていました。

忠実な軍国少年でした。

（政治部 烏山忠志）

[\[時代の証言者\] 共産党・不破哲三（3）「反戦・獄中の党」に傾倒](#)

2010.11.3 朝刊 12頁

わが家で最初に左翼の旗を掲げたのは父なんです。

父の上田庄三郎は1945年10月、戦争中投獄されていた共産党幹部の出獄歓迎集会に駆け
つけ、再刊された党の機関紙「赤旗」の第1号から読者になりました。3歳上の兄の耕一郎
は旧制第一高校（現東大）に進学していました。一高は治外法権的などころがあって、戦争
中もマルクスやエンゲルスに触れる機会があり、割と早く「マルクス派」になっていきまし
た。

私には、戦争中たたき込まれた軍国主義が1日で崩れたのが衝撃でした。敗戦の日、涙な
がしんんしょうたん
がらに「臥 薪 嘗 胆」を訴えた中学の教師が、一番早く学校を辞めてヤミ屋に転

身する。そんな変わり身の早さも目の前で見ました。

日本が突き進んだ戦争の真相もわかってきます。戦争に反対し、獄中で頑張り抜いた党があったという事実には、敗戦以上に大きな衝撃を受けました。それが共産党に傾いていく一番の動機でした。

もう一つは、兄の影響で戦争中から哲学の本を読んでいたけれど面白くなかった。でも、マルクスやエンゲルスを読むと、難しいなりにぴったりきたのです。

一高は全寮制で、兄と同じ「社会科学研究会」の部屋に入りました。47年の正月早々、友人が「どうも共産党細胞ができたらしい」って家に来ましてね。兄たちが46年暮れにつくったようですが、我々には声がかからない。「我々も入ろうじゃないか」と、すぐ入党手続きを取ったんです。

先輩には「拷問、大丈夫か」と脅かす人もいました。戦前のようなことはないだろうが、覚悟はいると思いましたよ。もちろん、党の一員になったという誇らしい気持ちはあったし、将来は職業革命家になると思いこんでいましたね。

それからは、党活動が生活の中心になりました。

一高には「寮にいる者が自治権を持つ」との建前があり、学内政治の中心は寮の委員長選挙。これも大事な活動で、左派の研究会が集まって候補者を出し、保守派の候補と勝ったり負けたりでした。自分でガリ版を切って、細胞新聞「自由の柏」も発行しました。

初めて街頭演説をした時は悩みました。マイクもないし、どうやったら演説会らしい光景になるかも分からなくてね。でも、ミカン箱とメガホンを持って渋谷の駅頭に出ると、人が集まって議論が始まるんです。

理論の勉強では、戦前の本を買いあさりました。当時は紙がなくて、欲しい本は神田や早稲田の古本屋さんで見つけるしかない。戦争中、警察に没収されていた左翼の本が返却されて売りに出たと聞くと、すぐ飛んで行ったものです。

しかし、その頃の党は「今はマルクスもレーニンも予想しなかった時代だ」とあまり理論を重視しなかったので、歴史的なものとして勉強するだけで結果的には蓄積に努めていました。

(政治部 烏山忠志)



旧制一高受験当時の不破さん

[時代の証言者] 共産党・不破哲三（4）学部ストの責任、停学

2010.11.4 朝刊 10頁

1949年、東大物理学科に進学しましたが、物理学の研究を仕事にするつもりはなかったんです。「党に入った以上は」と考え、まじめに党活動をしようと思っていたから、物理学教室に行っても、自治会活動のために授業は数えるほどしか出ていないですね。

大学時代は、「50年問題」が大きな出来事でした。

当時、海外放送を聞けるラジオをやっと手に入れました。雑書の中、懸命にモスクワ放送にダイヤルを合わせましたが、まさに問題の批判放送が始まった日でした。1時間ごとに繰り返される日本向けの放送を夢中で書き写しました。

批判は「日本共産党はアメリカ占領軍への態度があいまいで、公正な平和条約を結んで占領体制から日本を解放する任務に背を向けたまま、政権獲得を問題にしている。これは根本的誤りだ」という要旨です。



東大時代、メーデーの会場で（1950年5月）

共産党は、49年1月の衆院選で35議席を獲得して「政権獲得近し」の雰囲気になったのに、現実には労働者の首切りや弾圧の連続で、なぜ立ち上がらないのか、というイライラ感が党内に広がっていました。批判は痛烈でしたが、この限りでは納得できるんです。

「世界の共産主義運動は理論的水準が高い」と思いました。ところが、この批判は二重底で、根底には武装闘争を押しつけるというスターリンの戦略があった。その本質が隠されていたんです。

私は宮本さん側で活動し、教室とのつながりはますます薄くなりました。一問一答形式で武力闘争路線を批判し、組織の新聞に出したこともありました。50年秋には、学部のストライキの責任を取らされる形で無期停学になりました。

その間、ある出版社の「社会見学博物館」という企画の原稿を書くアルバイトを始めました。各産業の代表的企業を取材し、産業史や社会的意義、生産工程を紹介するものでした。

学生運動で忙しい日々の中、うまく休みが取れると日程を詰め込む。在学中に全国50か所くらい取材に回り、トヨタ自動車や日立製作所、鉱山や発電所などの現場を見ました。アルバイトでは一番面白く、就職後も何か月か続けました。

宮本さんと初めて会ったのも、東大時代でした。51年の五月祭（大学祭）で党の展示会を開いた時、宮本さんが見に来たんです。向こうは私の顔を知らないし、こちらから声をかける筋合いでもない。一方的な顔合わせなんだけれど、これが最初の出会いでした。

（政治部 烏山忠志）

【時代の証言者】 共産党・不破哲三（5） 労組書記各地で闘争支援

2010.11.6 朝刊 14頁

東大卒業後、労働組合の書記として11年間働きました。書記は縁の下の力持ち的な存在ですが、若い時に労働運動の現場に触れたことは、その後、党本部で活動するようになってからも非常に役に立ちました。

大学の停学処分は1年で解除されたものの、卒業を考えると、必要な単位を取るのはかなり大変でした。

経済学部なら卒業論文だけで卒業できるけど、理系から文系に移った例はないと言われてね。「しょうがない、もう辞めよう」と母親に話したら、やはり卒業してほしかったらしく、実に悲しそうな顔をするんです。そこで教授たちに頼み込んで、試験はリポートに替えてもらい、実験も何とかパスして、1953年3月に無事卒業しました。

就職先は心当たりがなかったので、父に話したら、「じゃあ、出版社を見つけてきてやる」と2社紹介してくれました。そこへ鉄鋼労連（日本鉄鋼産業労働組合連合会）の本部書記の仕事が舞い込んだので、そちらに決めました。

鉄鋼労連は51年に設立され、52年に総評（日本労働組合総評議会）に加盟した新興勢力で港区の本部もほかの組合の間借りでした。

配属されたのは企画調査部。賃金闘争や合理化問題、経済情勢の分析といった分野が主な担当でした。

ふだんはほとんどデスクワークですが、賃金闘争や一時金闘争の時期には「オルグ」として出張します。

私は関西に行くことが多く、傘下の全組合の闘争が解決に至るまで現地にいるんです。関西



鉄鋼労連本部に勤めていた頃、職場で新しい交代制の説明をする不破さん

の場合、20 くらいある組合の状況を全部つかんで、本部に報告しなければならない。闘争や交渉の相談から職場集会、活動家による夜の会議までいろいろ経験しました。

越年闘争の際、「長くて1週間ぐらい」という予定で関西に行ったところ、すぐに「呉（広島県）の組合が心配だから、そっちの応援を頼む」と言われ、年末のぎりぎりまで頑張ったこともありました。

最も盛り上がったのが、57年秋の賃金統一闘争の時でした。私は、八幡製鉄所（現新日鉄八幡製鉄所）の応援に派遣されました。

ようこうろ

八幡では大正時代に大ストライキがあり、「溶 鋳 炉 の火は消えたり」という闘争記が有名でした。その時以来の、それも波状的なストライキとなりました。

組合側が統「一的な闘争態勢を組めば、資本の側も結束を固め、切り崩し作戦をしながら一歩も引かない。私も、10月8日の第1波から、12月4日に予定した第12波の直前にスト中止指令を出すまで、11波のストライキ闘争にずっと泊まり込みでつきあいました。

会社側が活動家を脱落させようと、家族の就職を邪魔することもあり、資本のやり口がよく分かりました。

（政治部 烏山忠志）